

華麗なる誘拐

西村京太郎



徳間文庫

徳間文庫



か れ い ゆ う か い
華麗なる誘拐

© 1982 Kyôtarô Nishimura Printed in Japan

104-7

1982年8月15日 初刷

著 者 西 村 京 太 郎
にしむら きやうたろう

発行者 徳 間 康 快
とくま やすよし

東京都港区新橋四一〇丁一〇五

発行所 株式徳間書店
会社

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)

振替 東京四一四四三九二番

製 本 印刷 凸版印刷株式会社

〈編集担当 金城孝吉〉

ISBN4-19-567340-2 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳 間 文 庫

華麗なる誘拐

西 村 京 太 郎

目次

第一章	オリンピック作戦	5
第二章	重要参考人	40
第三章	第二の殺人	68
第四章	福岡空港	98
第五章	プラスチック爆弾	125
第六章	意外な展開	161
第七章	安全を買う	197
第八章	コロネット作戦	223
第九章	新天地の夢	255
第十章	獅子と毘	280
第十一章	勝利と敗北と	313
解説 武蔵野次郎		346

第一章 オリンピック作戦

1

新宿西口の三十六階建の超高層ビルの最上階に、左文字探偵事務所がある。

ここに看板をかかげてから今日で一カ月になるが、ドアをノックした客は一人もない。見事なほど、一人も来ないのだ。

所長と秘書の二人だけの事務所といっても、秘書の史子ふみこは、結婚したばかりの左文字の細君である。

「秘書として申し上げますけど」

と、その史子が、長い足を投げ出して新宿の夜景に見とれている左文字に、改まった口調で話しかけた。

「この分でいくと、今月は、完全な赤字ですよ」

「そりゃあ、そうだろう」

と、左文字は、暢気のんきに笑って、

「何しろ、収入がゼロなんだから」

「あたしは、三十六階というこの高い場所がいけないんだと思うんだけど」

「何故だい？」

「ここまでエレベーターで、三分はかかるわ」

「正確にいうと三分六秒だよ」

「ものを考えるには十分な時間だわ。事件の依頼にやって来た人も、三分六秒エレベーターに乗っている間に気が変って帰ってしまうんじゃないかしら」

「なかなか哲学的な考察だねえ」

「茶化さないで」

史子が、眉を寄せる。

左文字の方は、相変わらず、のんびりした顔で、

「どうだい。気分転換に、下の『エトランゼ』にコーヒーでも飲みに行かないか」

「コーヒーなら、インスタントがあります」

「どうも女というやつは——」

「何ですって？」

「なに、女性は経済観念が強くて結構だということ。しかし、今は、本物のコーヒーが飲みたいね」

回転椅子から立ち上ると、ひどく背の高い男である。

その上、髪は黒いが、眼が青いので、外見は日本人には見えない。

左文字進は、一九四五年、ロスアンゼルスで、日本人の母と、ドイツ系アメリカ人の父との間に生れた。

日本人の母からは、東洋人特有の繊細さを、アメリカ人の父からは、バタ臭い外見と、論理的な思考癖を受け継いだ。

コロンビア大学で犯罪心理学を学んだあと、サンフランシスコの探偵事務所で働いていたが、両親が相次いで病死したのを機会に、日本にやって来た。

その時、たまたま友人が巻き込まれた事件を解決して見せた。事件で知り合った藤原史子と結婚し、日本国籍を取得して、ここに探偵事務所を開いたのは、その後である。

2

「エトランゼ」は、ビルの二階にあつて、美味いコーヒーを飲ませるので人気がある店だった。暖かい頃は、テラスにもテーブルを出しているのだが、春先の今は、ガラスの窓越しに、夜景を楽しむようになっていた。

店の隅に置かれた白いピアノでは、若い女性。ピアニストが、ほとんど無表情に「セレナード」を弾いていた。いかにも、アルバイトで弾いているという感じだった。

テーブルは三十五から四十ぐらい並んでいる。

近くのサラリーマンが帰りに寄ることが多いので、この時間、席はほとんど満員だった。左文字と史子は、窓際の席があくのを待って、腰を下した。

すぐ背後の壁には、「あらゆる調査に応じます。正確、迅速、低廉。本ビル三六階、左文字探偵事務所 TEL 344-89××」と書いた広告がかかっている。この店の主人の好意で、かかっているのだが、どうにも、あまり効果がないようだ。

この店に来る客は、みんな、探偵事務所に調査の依頼などする必要のないほど、幸福そのものなのだろうか。そういえば、幸福そうな若いアベックが多い。

今夜も、左文字たちの隣のテーブルでは、二十歳ぐらいの若いカップルが、楽しげな笑い声を立てていた。二人とも、同じ空色のジーンズ・ルックで、聞くとともになく会話を聞くと、どうやら、大学生らしい。

「来月から、方針を変える必要があるわね」

史子が、運ばれて来たコーヒーに、砂糖を入れながら、真面目な顔でいった。

外国旅行の話からロックの話、次にセックスの話と、何の脈絡もなく、くるくる変っていく隣りのテーブルのアベックの話を、面白く聞いていた左文字は、

「え？」

「困るな。真面目に聞いてくれなきゃあ」

史子が、男みたいな言葉遣いになる時は、緊張した時か、不機嫌な時だ。

「真面目に聞いてますよ。僕は、二杯でいい」

「砂糖ぐらいは自分で入れて」

「おや、おや」

「離婚の原因の二番目は、経済的破綻はたんだということを、よく考えてみて頂戴ね」

「一番目は何だい？」

「性格の不一致」

「その方の心配はなさそうだね」

「なぜ？」

「友人が、僕たちのことを、似た者夫婦だといっていた」

「あたしたちに、そんな馬鹿なお友達がいたなんて初耳だわ」

史子が、憎まれ口を叩いた時である。

突然、隣りのテーブルで、

「ゲエッ」

という、けものの叫び声のような悲鳴があがった。

はっとして、左文字が振り向いた。

その青い眼の前で、ついさっきまで、よく笑い、よくしゃべっていた長髪の若者が、のどをかき

むしりながら、椅子から床に転げ落ちた。

続いて、女の方が、甲高い悲鳴と共に、床に倒れた。

椅子が、けたたましい音を立てて横倒しになり、コーヒー茶碗が、はじけ飛んだ。熱いコーヒ―

が、その勢いで、左文字のズボンの裾にふりかかった。

「た、たすけてくれッ」

床に転がった青年は、のたうちまわりながら、凄まじい表情で叫ぶ。その声が、押し潰されたようにかすれている。

女の方は、細い身体を、えびのように曲げて、呻き続けているだけだ。全身がけいれんしている。他のテーブルの客たちは、何が起きたのかわからずに、呆然と眺めている。

左文字だけが、冷静に、素早く反応した。

「救急車を呼んでくれッ」

と、近くにいたウェイトレスに、大声で頼んでから、史子に向って、

「吐かせるんだッ」

と、怒鳴った。

「え？」

気丈な史子も、さすがに、おろおろしている。

「毒を飲んだんだ」

「吐かせるって、どうしたらいいの？」

「水をじゃんじゃん飲ませて、吐かせやすいようにしてから、のどに指を突っ込むんだ」

左文字は、ぶるぶる震えている青年を抱き起こすと、無理矢理口をこじあけ、コップの水を飲ませた。

そのあと、相手ののどに指を二本突っ込んだ。

呻き声をあげながら、青年は、茶色い液体を、次から次へと吐き出した。

隣りでは、史子が、女に対して、同じ応急処置をしている。

「だめだわ」

と、史子が悲痛な声をあげた。

「どんどん衰弱していくわ」

青年の方も同じだった。多分、毒が多量だったのだ。吐き出す前に、全身にまわってしまったのだ。

やっと、救急車が駆けつけた。

3

左文字と史子は、参考人ということで、新宿警察署に呼ばれた。

そこで、事件の模様を陳述させられたが、何故か、それがすんでも、帰らせてくれなかった。
「ついてないわね」

史子は、薄暗い廊下の固い長椅子に並んで腰を下し、左文字に向って、肩をすくめて見せた。

「きつと、今頃、最初のお客が事務所を訪ねてるわよ」

「何故、そんなことを思うんだい？」

「ついてない時って、たいていそんなものよ。事務所に帰ると、怒った客が蹴っ飛ばした痕がドアについてるわ」

「君は面白い想像をするんだねえ」

「どうして、話がすんだのに帰してくれないのかしら？」

「わからんね。ひょっとすると、僕たちが、あのカップルに毒を飲ませたと思っているのかも知れないな」

もちろん、冗談でいって、左文字は、煙草を取り出した。

盛り場の中にある警察署だけに、やたらに賑やかだった。酔っ払いが連行されてくる。大金を掏すられたといつて、中年のサラリーマンが青い顔で駆け込んでくる。素人娘のようなパンマが、ふてくされた顔で引つ張られてくる。バーで喧嘩したといつて、顔を血だらけにした若い男がやってくる。結構、面白くて退屈しない。

一時間近くたってから、若い制服姿の警官がやって来て、

「こちらへおいで下さい」

と、丁寧にいった。

案内されたのは、署長室だった。

部屋には、二人の男がいた。

一人は署長だが、もう一人の背広姿の男に、左文字は、見覚えがあった。

警視庁捜査一課の矢部警部だった。中肉中背の温厚な感じだが、切れる男だということは、前に、巨人軍が誘拐されるという奇妙な事件で一緒に働いたので、よく知っている。

「一カ月ぶりかな」

と、矢部警部は、二人に向って微笑した。

「まあ、坐って下さい」

署長が、左文字たちに、椅子をすすめた。

「あの二人、どうなりました？」

史子がきくと、矢部警部が、

「病院に着いてすぐ死にましたよ。青酸中毒です。男の方も、女の方も」

「どうも、よくわからないんだが」

と、左文字が、口をはさんだ。

「何が？」

矢部が、きき返した。

「何がって、僕たちの事情聴取は、もう終わった筈だよ。それなのに、何故、こうやって残されているのかねえ？ それに、捜査一課のあんたが、何故ここににいるのかもわからないな」

「それを、これから説明しようと思っている」

「ぜひ、そうして貰いたいね」

「ただ話す前に約束して貰いたい。話を聞いたからには、われわれに協力してくれることをだ」

「どうやら、難しい事件らしいな」

「ああ、そうだ。貴女も約束してくれますね？」

矢部警部にきかれて、史子も、堅い表情になって、「ええ」と肯いた。

「今夜の事件から説明しよう」

矢部は、脚を組み、愛用のパイプに火をつけた。そんな態度は、落着き払って見えたが、自分を落着かせようとしているのかも知れなかった。

「男の方は、S大文学部の学生で二十歳。名前は青木利光。女の方は、T女子大の学生で十九歳。名前は横尾美津子。だが、この二人の名前は、あまり意味がない」

「何故だい？」

「それは、話してるうちにわかってくるよ。死因は、さっきいったように、青酸中毒死だ。もちろん、二人の飲んだコーヒーから、青酸反応が検出されたが、最も興味があったのは、あのテーブルに置かれたシュガー・ポットの中の砂糖に、多量の青酸カリの粉末が混入されていたことだ」

4

「それは、本当なのかい？」

「嘘をいったって仕方がないだろう」

「あんたは、自分のいったことの意味がわかっているのかい？」

「私は、これでも、警視庁捜査一課の人間だよ」

矢部が、苦笑した。

が、左文字は、蒼ざめた顔で、

「今夜、僕たちがあの店へ行った時、席が全部ふさがっていた。待っている中に、窓際のテーブルがあいたので、そこへ坐ちた。そのすぐあと、隣りがあいて、あの若いカップルが坐ったんだ。もし、そっちが先にあいていたなら、僕たちが、そこへ坐っていたんだ。もし、そうになっていたなら——」

「間違いなく今頃、君たちは、救急病院で冷たくなっていたらうね」

「やけにあっさりいうねえ」

やっと、左文字の顔に、微笑が戻った。

「冷厳な事実をいつているんだ。あの店の経営者や従業員がそんなことをするとは、まず考えられ

ない。となると、あのカップルの前に、あのテーブルに坐った人間が、砂糖に青酸カリを混ぜたということになるんだがね」

「いや、そうともいえないだろう」

と、左文字が、異議を唱えた。

「何故だい？」

「すぐ前の客が、コーラでも飲んだとすれば、青酸入りの砂糖は使わないし、ブラックでコーヒを飲む客も、かなりいるからね。だから、前の前の客が犯人かも知れない」

「確かにそうだ。ウェイトレスが、あのカップルの前の客の顔を、かなり良く覚えていてくれたんだが、そいつが犯人とは限らなくなるわけだね」

「長髪で、あごひげを生やし、厚手の茶色いセーターを着た二十七、八の男かい？」

「何故知ってるんだ？」

「僕は、アメリカで、正式に私立探偵のライセンスを持って働いていた男だよ。あんたと同じく、プロなんだ。近くにいる人間を、自然に観察する癖がついている」

「それは失礼したね。ところで、問題なのは、犯人が、あのカップルを狙って殺したかどうかということだ」

「そうは思えないね」

「何故？」

「僕は、聞くともなく、あのカップルの会話を聞いていた。いろんなことを、取りとめもなく話していたが、この店は、初めてだけど、なかなか雰囲気がいって、いつていたからだよ。行きつけ